

ヤンゴン素描

1. 西の港チーミンダイン

山形洋一



ヤンゴン市をめぐる循環鉄道外回り線は、中央駅を出るとまっすぐ西へ向かい、ダゴン町の南の縁に沿ってゆるやかな右カーブを描く¹。道路より一段低い鉄道の両脇には、民家の壁や草木が迫り、眺めはあまりよくない。だが4つ目のアロン・ラーン駅を過ぎるあたりから左窓側に地面が低くなり、バーガヤー道路をまたぐ鉄橋で見晴らしが開けると、やがて汽車はチーミンダイン駅の広い構内に入ってゆく。

かつてプローン（現在のピー）方面へ向かう鉄道が敷設されたころは、ここが最初の停車駅だった。それだけに線路の数が多い。プラットフォームがあるのは、駅舎に接する1番線と、そのすぐ西の2・3番線だけだが、その西には追い越し線が2本、車両整備用ピットつき1本、貨車を留め置く線が6本。これだけの本数があるのはここと中央駅とインセイイン駅だけで、長円形の路線図では他の駅のように●印でなく、■印で区別している。赤レンガ建ての駅舎のアーチや、KEMMENDINE という英語風のつづりに、植民地統治の面影が見ることができる²。

陸橋を西へ渡りきると、目の前のアッパー・チーミンダイン通り (Upper Kyi mying daing road) があり、そこから西がチーミンダイン町、手前はサンチョウン (Sanchaung) 町だ。

チーミンダインの町は短冊形^{たんざく}（細長い長方形）に仕切られ、下町（南の商業地区）のミニアチュアのように、南を向く下町の短冊道路に対して、西を向くチーミンダインと、向きが異なって、川風を入れて町を冷やす工夫に違いはない³。建物はまちまちで、伝統的な木造二階建て、その一階をレンガやコンクリートで補強した改造二階建て、コンクリートの五ないし七階建てアパートなどが入り混じっている。

どの道でもよいから選んでまっすぐ西へ400メートル歩くと、川の縁に出る。運悪く倉庫や製材所、精米所にぶつかったときは、左右のどちらかに折れてみよう。やがて大小さまざまな船が見えてくるはずだ。

¹ ミャンマーで自動車はアメリカ式に右側通行だが、列車はイギリス式に左側通行する。したがって循環線は東京の山手線同様、外回りが時計回りになる。

² ミャンマー語のローマ字つづりは不統一で、チー (Kyi, Kye), ミン (Myin, Min), ダイン (Daing, Dain, Dine) が見られる。Google map でも統一されていない。

³ 短冊構造ができたのは下町で1852年、チーミンダインで1855年。清風を入れることは、当時マラリア予防になると信じられていた。

2 本のオールをつけた小舟は岸近くまでこぎ寄せ、客を対岸に運ぶ。大きな船を泊めるには水深が必要なので、埠頭（コンクリートの壁）か、沖に突き出た浮棧橋が必要となる。潮汐の影響で棧橋の勾配はゆっくりと、しかし確実に変わる。バナナの房やコメの袋をかついで棧橋を渡る男たちの列や、ココナッツを埠頭まで放り上げるパワークなどが珍しい。埠頭にはサトウキビの束やバナナの房が並び、入ってきたトラックに積まれては、どこかへ運ばれてゆく。

埠頭伝いに歩こうとしても、精米所や木場で妨げられるので、いったんすこし東に戻り、町の西端にあたるチーミンダイン・カンナー通り (**Kyi Myin Daing Kanner Raod**) に出る。カンナーは堤防の意味で、テームズ河畔のストランド (Strand) をまねて、まずヤンゴン市南端に作られ、ついでチーミンダインにも作られた。

だが河港としての歴史はチーミンダインの方が古く、ヤンゴンが新しい。地名の由来はアヴァ王朝のミンチスワソウケ (Minkyiswasawke) 王 (在位 1368-1401) がここから東のシュエダゴンパゴダを拜んだことによるという。Kyi も Mying も「見る」、Daing は「報告」の意。「来た、見た、勝った」でなく、「見た、見た、報告した」である。1755 年、コンバウン朝初代アロウンパヤー (Alaungpaya, Alompra) 王 (在位 1752-1760) がヤンゴン建設に着手したとき、船乗りたちの居住区はチーミンダインに置かれた。



南下するライン (**Hlaing**) 川は、このあたりでゆるやかに右カーブするので、その外側 (東岸) にあたるチーミンダインの

岸が削られて急になり、川底がえぐられる。つまり自然の良港なのである。それより下流では川が左にカーブするので、日本人学校のあるアロン町の岸は遠浅で港には向かない。こうした微妙な地形の違いを読んで、都市というものは設計される。

ここまで来たのなら、魚市場はぜひ見ておきたい。チーミンダイン 堤^{カンナー} 通りを北上し、パンプンジー (Pann Pin Gyi) との角から北西に魚市場がある。東西 100 メートル、南北 300 メートルの敷地に並ぶ市場の建物の中は細かく仕切られ、一段高いところに座を占めて競りを仕切るのはおおかた男、買い手はおおかた女で、魚をサイカー (サイドカーつき自転車) まで運ぶ男たちは、首の後ろにビニールシートをくくりつけている。こんな仕事をしながら芥川賞をとった男が日本にいたことを思い出した。

製氷施設がこの魚市場にはなく、10 トントラックで氷のブロックが運び込まれると、ベルトコンベアで持ち上げられて、砕氷機で砕かれ、魚とともに発泡スチロールの箱に詰められる。トラックの荷台全面に氷を敷いて、全長 1 メートルを超える大型のコイを何層に

も積み上げるのは、主として 10 代後半から 20 代の青年たちだ。暗雲が押し寄せて底が抜けたように大雨が降り出すと、男たちはあわてて荷台に幌をかぶせ、氷が融けるのを防いでいる。トラックの大半は日本の中古車だ。

チーミンダインの人口密度は、45 町のうち 10 位だが、それは対岸の農村部を含むために薄まった結果で、東岸だけなら下町 5 町に次ぐ 6 位あたりに食い込むだろう。西岸を含めたのは課税のためか、それとも治安のためか。

英領時代の記録によれば、西のチーミンダインと東のパズンダウンは、犯罪と疫病の巢窟だったらしい。1877 年、下ビルマが英領インドに併合され、ラングーンが州都になる。1886 年にはマンダレーを都とする上ビルマのコンバウン朝が亡び、ラングーンは上下合わせた「ユニオン」、すなわち英領ビルマの首都となった。インド人、中国人、アフガン人、アラブ人などが移住して人口 24 万 8 千人の国際貿易都市になるが、現地人（ビルマ人）の



多くは南の都市部から締め出され、チーミンダインに移住した。そこではつねに水不足と不衛生に悩まされ、火事にもしばしば見舞われた。

当時の暗さを想像するのがむずかしいほど、今の町は明るく清潔である。中央通りをさえぎるようにして僧院と市場（スーラト・バザール）が置かれている。市場

は Google マップでは **Night Market** と書かれているが、朝の 10 時半ごろに開き、夕方には閉じている。遅くまで商売を続けているのはむしろ南のティーダン (**Htee Dan**) 通りの方だ。

ハンサワディー (**Han Thar Waddy**) 駅の西にカーブしているネイッバン (Neik Ban、涅槃) 通りは、Google マップでは名無し道だが、かつて引き込み線が通っていた。その一角、チーミンダイン^{カンナー} 堤との角をアーンドラ・プラデーシュ出身者たちが買い取り、南インド風のヒンドゥー寺院を建てた。寄進者の多くは南の商業地区を中心にベアリングやバッテリーなど自動車部品を商っている人たちで、インド、シンガポールの取引先からの大口寄付もある。

英語、ビルマ語、ヒンディー語、タミル語で「ラーマ寺」と書かれ、塔の一角にはサルのハヌマーンが座り、堂内にはラーマーヤナ物語の絵解きが描かれている。ブッダの像も置かれているが、ヒンドゥー寺院に欠かせないシバリンガ（陽根）は建物中央のガルバグリハ（子宮）ではなく、堂内でも脇の方に置かれている。シバ座像は境内のはずれにあり、荒ぶる妃ドゥルガの像がないのも、ヒンドゥー寺院としては異様である。

1930 年、インド系港湾労働者がストライキを起こしたために、港湾側が一時ビルマ人を

雇用したことがあったが、ストが解決するとビルマ人労務者は職を解かれ、怒った彼らはインド系住民を虐殺した。これが引き金となって一連の民族対立が起こり、ついには独立運動に発展する。結果から見れば、インド系住民はビルマ独立の捨て石になったわけだ。

ヒンドゥー教では釈迦もラーマもヴィシュヌの化身とされている。ブッダと同格の正義の神ラーマの寺を港の近くに建てた背景には、悲劇の犠牲者を悼む気持ちと、民族融和への願いが込められているのだろう。いまの魚市場では、ビルマ系と南インド系が交じって働いている。

(2012年9月15日、下線付きの地名はGoogleマップで検索可能なもの)

参考文献

Bird, G. W. (1897) Wanderings in Burma. Reprint with new introduction. White Lotus, Bangkok. 2001.

Cangi, E.C. (1997) Faded Splendour, Golden Past. Urban Images of Burma. Oxford in Asia Paperbacks. Oxford University Press.

Leicester, P. (1959) The Geology and Underground Water of Rangoon. With Special Reference to Tube Wells. Government Printings and Stationary, Union of Burma. Rangoon (付録地図は1928年作成)

Yangon City Development Committee (1996, 2010) The Map of Yangon. 4th Edition.

ブリタニカ国際大百科事典 (Casio Ex-word dataplus)

筆者紹介。やまがたよういち 1946年大阪府生まれ、東京大学農学部卒、農学博士(応用昆虫学)。元JICA国際協力専門員、現JICA主要感染症対策プロジェクト・チーフアドバイザー。主な著書『長塚節「土」の世界 写生派歌人の長編小説による明治農村百科』『「土」の言霊 歌人節のオノマトペ』(未知谷)、『面白く学ぶネパール語』(国際語学社)。

